

定本

西尾 葉句集



定本 西尾 栗句集

序 文

橘 高 薫 風

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

麻生路郎先生の指導で、昭和六年七月二十五日、天神祭の日に発足した阪大川柳会の、創立句会の席題「温泉」で、天位を獲得したのがこの句である。初心も初心、のっけから脚光を浴びたことでも、西尾栞先生（当時は佐野栞）の才能が分かる。先生二十二歳。平成五年、香川県白鳥町にこの句碑が建てられた。

一歩出ずれば吾れ旅人となる心

芭蕉の「奥の細道」の行雲流水のころとも言うべき羈旅の真髓に触れたこの句は、昭和五十五年、栞先生の川柳生活五十年を記念して、地元の八尾の聖徳太子ゆかりの大聖將軍寺門前に、句碑として建立された。

その句がその人により生を享け、あるいは剛直に、時に華奢に、または洒脱に、それぞれの感興を伝えるが、真実の句は、時代を超えていよいよ芳醇な味を深める。親子の絆と同じに、作者と句の間にも太い絆や曰く言い難い因縁を生ずる。そういう句を創れるのは栞先生が川柳を自然愛、人間愛の文芸と観じ、和顔愛語の精神を貫かれた賜と私は理解している。

和顔愛語元旦の心しる

栞先生は家族を大切にされた。人間として当然のこととはいえ、これを全うするのは、並大抵の努力では適うものではない。

頭ほど光らぬ父でありにけり

張り替えた障子の中に母います

最後の最後の味方は妻なりき

意見する儂がまだまだ遊びたし

ようきいときやと妹ついでに叱られる

路郎先生が戦後間もなく栗先生を『川柳雑誌』の後継者として白羽の矢を立て、編集と経営のノウハウを叩き込もうとされたときがあった。栗先生は厳しい戦後の生活を理由にこれを断わられた。以来、路郎先生とは即かず離れずの距離で、川柳の遠い道のりを歩み続けられたのである。この事実が路郎先生の死後、ますます円満洒脱、融通無礙の西尾栗風を形成したと思える。その成果は、先の随筆集『水鶏庵こらむ散歩』となり、この句集に集大成された。

人恋し人煩わし波の音

二次会で土産の鹿の角がとれ

ハンドバッグ迷える心パチつかせ

オーロラに煉瓦の街は哀しかり
お互いに中毒ですなと酌ぎこぼし

半玉に男ざかりの手をひかれ

酢昆布の匂いで妻にささやかれ

牛の瞳に人間何をあわてとる

虞や虞や汝を如何せん四十八

風花に酒樽並ぶ町を行く

新幹線隣は何をする人ぞ

てつちりや路郎門下の生き残り

読者は一読再読、なおまた三読して、得難い栞先生の句境と共に遊んで頂きたい。

四十年のご厚誼を得た弟子が、序文の筆を執るありがたさに心からの感謝を捧げます。

平成八年三月六日

序 文

東 野 大 八

一歩出ずれば吾れ旅人となる心

栞

旅のこよなくお好きな栞先生が、はからずもその蒼天へ旅立たれてから、早いものでもう一年の歳月が経ちました。

弘法大師のお言葉に「一歩三礼」というおサトシがあります。栞先生は、そのお心をころとして句碑にされましたな、と句碑祝いの席で申し上げましたら

「その第一歩は閻魔さんの前かもしれないな」

と例のニコやかな笑顔で応えられました。なんとその先生は古参同人の一人に

間魔さんに一杯飲ませて帰って来い

栞

と、その親友への悼句を詠まれておられるのでした。従って今もこの句の通りの気軽さで、ヒョッコリおもどりになるような気持がしてなりません。そんな夢を、今もくり返しつつけるわたしです。

先生には、川柳塔誌別冊としての、おめでたい本が二冊あり、それに加えて川柳塔誌八百号記念の、華やかなおまつりもあります。その折、晴れがましくも来賓席で肩を並べた田辺聖子先生に、会も進み、披講の時間となりましたので、「先生、お忙しいでしょうからもうこの辺で…」と申しましたら「いや、栞先生のご披講をお聴きしてから…」と温くも強いその言葉の笑顔が還ってきました。この方も、栞先生がお好きなんだな…と合点し、ついこちらもうちうなずいてニッコリでした。

いま、その誰からも、みんなから愛され続けた西尾栞句集が出版される。こんなうれしいことはない。美与子夫人もお喜びでしょう。

最後に「ひろちゃんに愛したいな」とおっしゃった、昨春のおめでとう会でのお別れの一言に応えて、去る花冷えの三月、めでたく高校卒業のひろ子と老妻をつれ、八尾のお

宅のご仏間で、三日間の滞在中、美与子夫人と声を揃えて心経をお唱えしました。

「ようきてくれはりましたな。有難う」

その先生のお顔が、ニコやかにお灯明の向こうにありありとみえました。

先生、どうぞお安らかに……合掌—。

もくじ

序	文	橘高薫風	2
序	文	東野大八	6
西尾	栞句集		10
索引			225
あとがき	西田柳宏子		244
著者略歴			246

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

糶上げてあとついてこぬ頼りなさ

輪にふいて其の後に来るもの考える

帰朝者は天井裏で生きていた

秩父丸着いて茶漬を褒めちぎり

若旦那女将が出ると他愛なし

事毎に女将八罫を見て貰い

カツとなる癖をまんまと利用され

容態をきけば惚気も交じって出

引越した後に椿が寒う咲く

転宅に方角のない若さなり

心得た女中に女気に入らず

今更に恋を気付いて間に合わず

見送りに坊やを高くさし上げる

留守居して失業の日を思い出し

留守番を買って出たのは外ならず

本妻の方が粹だという噂

こんな字を書いてもらうに墨をすり

腹の虫居所悪し髪の出来

橋へ来て洒落がわかった副主任

デカメロン読むに書斎にとじこもり

末ッ子にやりこめられて良い機嫌

椅子はあいたが市長の椅子だとさ

掌で唇ふいて昼の酒

兵児帯のゆるみへ春の雲がとぶ

羽左に似た耳で長男かしこまり

人生四十染直しよく似合い

父・母

初めて「父」という題で作った句

頭ほど光らぬ父でありにけり

岳父昭和三十一年八月二十七日歿

時計のような生涯とじた七十一

臨終は手塩にかけた掌を握り

嚴父昭和十七年一月四日歿

戦捷の春の臨終安かりき

マニラ陥落きいて享年六十九

十八人の孫に寢棺はとりまかれ

ソファアーに刀自という名のかさひくし

矢倉寿司だっせと遠い耳へきかし

親子二代のへんくつに母は老い

張り替えた障子の中に母います

見送りの母ポケットへ無理に入れ

うす糊がきいてる母の小さい足袋

木の芽あえ母すこやかに八十九

母昭和四十一年十月十四日歿

手提袋持たす寝棺に又哭きぬ

鯨幕の上に万朶の秋桜

母逝きて七日の鐘の冷えて来る

覚悟とは別に七日七日の寂しさよ

河内の灯

習いたての手品は妻にしてみせる

アベックに違いはないが五十八

添寝して父の無情を唄にする

ネクタイをしめしめ喧嘩のつづきする

おつうじのあつた話題も老夫婦

老妻に手を貸す梅の径でよし

時雨よし河内のはての灯を守る

紅葉寺明治の夫婦手をつなぎ

燃えもせずさめもやらずに珊瑚婚

迎え傘の妻に教える水溜り

悟れる如く諦める如く老夫婦

家族風呂

皿割った音を奥さん寝間できき

意見する儂がまだまだ遊びたし

姑は半分きこえる耳をもち

掃苔の一人は義理の仲の人

孫が来て碁石がたりぬ駒がない

苔はやす石を孫等のすべりんこ

巻ずしの中だけ食べる祖母育ち

染め直し昔の生地をほめられる

ゆきとどいた言葉で姑おくり出し

鼻がようきいて姑の因果なり

五人目の孫抱く力余りけり

孫達のとりあう膝をひろく組む

おんなじ話きくも孝行の一つなり

せやさかいにとゆるう叱られる

みんな帰してホンにおなかすきました

それぞれにスポンサーがあり孫達者

俺は独酌妻は家計簿差し向い

ギヴアンドテイク

べんちやらを言い言い判取してしまい

判取をしいしい容態きいてくれ

セールスは譬え話をたんともち

得意先のボンボン抱いて泣かれたり

交渉はギヴァンドテイクの肚でいる

操短の工場の上の揚雲雀

倒産へ非力な親類ばかり寄り

ひがんできけば機械の音も借金借金

菜の花の中の工場は閉めてあり

或る日

飛び乗りの今度は切符さがし出し

鰹節水晶の型にかかれたり

踏切まできて鶏引き返し

一筆の富士は漢詩でうめ合わせ

音痴今日詩吟を習うことにする

仮縫いのお世辞前から後ろから

かしわやの積んだ籠から刻をつけ

どっちが生意気だと窓口言い返し

誰にきいても知らん知らんという鋏

おまえ使うていたんかという鋏

雨洩りの型ピカソともマチスとも

名曲のすんだ拍手へ目をさまし

中風を見送ればという遺産あり

挨拶のものをもらった声となり

家出の娘に叱らん説と叱る説

倉の鍵旧家という音で開き

表具負けになると表具師思えども

叱らん先に出勤のすんまへんすんまへん

案内はここで笑わすせりふあり

お向いと話してお隣に妬かれ

御近所が舌打ちをする家が建ち

水煙あげて神輿は洗うもの

札束を肌の温みのままで出し

首洗池蛙観海流で逃げ

海^め布^えを煮く家風は暗い台所

皇太子さんでもとントントン拍子なり

昭和三十七年十二月五日工場全焼

焼け跡で星を見上げている広さ

スタミナがどうのこうのと普茶料理

琥珀色の湯呑の主は生字引

まばたきもせず埴輪の笑みつづけ

敬老敬老とタクシーへ押しこまれ

しんみりとさせて持味ある高座

ポスターはここから撮った朱の華表

カメラアイ蜻蛉の目玉蝶の髭

天ぷら屋この腕という長い箸

スラスラと特許番号香具師は言い

ラツシユ嬉しまさに唇ふれんとす

茶と苳　苳とお茶で萎びてゐる

靴ベラは手品のように仕舞われる

首巻をとる真似だけの家主なり

吸物の冷えたを板場くやしがり

干竿の落つこちた鶏のあわてよう

ターミナル再会という名の喫茶店

うりぎね顔質素な家に生れて来

横町のその横町の握りずし

骸骨の講義骸骨横をむき

帰郷してやたら名刺をくれたがり

雀の涙ほどとは貰う方

差し押さえ金庫の上の鏡餅

大体どこで落したとは無理な訊ねよう

君づけで社長を訪えば秘書あわて

旅　　枕

旅や旅　情緒というを見のがさず

人恋し人煩わし波の音

イメージの踊り子もみず伊豆の秋

桑の葉をたたいてバスの行き違い

盃に島の唄ありひとり旅

宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来

河鹿きく妻も同んなじ宿浴衣

白樺の道 団体でゆくあほらしさ

絵葉書は水量のあった頃の滝

滝を背に逆光線も已むを得ず

スーツケース僕が持つうちが持つ

茶碗一つ置いて清水店きよみずとなり

河童橋写真を撮す順があり

大阪弁で信濃の空の碧さほめ

日本ライン盃洗にして酌み交わし

一步出ずれば吾れ旅人となる心

プラットに佇った姿も旅のもの

船酔いへ港の見えたことを言い

訪
台

日本語で見送られ台湾語で迎えられ

燕翔ぶ港の街の旅鞆

観光ずれを口々唧つ宿浴衣

逝く春を句便りにして独り旅

釣人も景色となった雨の静

筏乗り絶景のところが忙しい

名園の借景となる東山

旅枕雨にしあれば雨の詩

土肥温泉

明日乗る汽船みている宿の窓

香具山を指さす先を蝶が舞い

草の名でもめて吟行面白し

籐椅子のおく位置があり海が見え

団参の赤いリボンも春のもの

壺焼へ指さす島の春霞

城跡から指さす馬場の花吹雪

三階の宿の手欄に富士が晴れ

一匹の蠅と夜汽車の旅にあり

一二 駅過ぎて落ちつく旅心

二人降り一人が乗った雪の駅

城崎の雪を相合傘で出る

溢れ出る温泉へ母 南無阿弥陀 南無阿弥陀

電灯の暗さ温泉効きそうな

湯の街のシンボルという橋一つ

山の湯の夜風をほめる窓をあけ

白骨温泉

上求菩提下化衆生ここだ虫の声

介山碑の上音なしの秋の雲

白骨の湯の香湯の色夢うつつ

宿浴衣橋で会いバーで遇い

湯の宿の三階建は溪に沿い

孝行のしおさめという温泉につかり

露天風呂一葉浮かべているぬるさ

一年をこつこつ貯めて温泉につかり

晩 酌

二次会で土産の鹿の角がとれ

お互いに中毒ですなと酌ぎこぼし

劣性遺伝と彼もみとめたはしご酒

酒仙とも言われ中毒とも言われ

おごられる方がトコ姐さん酒もってこい

酒の勢いで墨痕淋漓たり

晩酌の一杯だけは妻が酌ぎ

豆もろこ三日つづいた猪口を置き

会葬の帰り死んだらあかん酒を酌み

またしてもタイミングのあわぬ妻の酌

ビール瓶の露のままなる酌うれし

茶屋酒がだんだん旨い地位になり

二日酔いものに動ぜぬ姿なり

誘惑はおみきを入れてからのこと

健康法きけば盃もつ仕草

飲める身のケチな雪とはおもえども

彼は酔いマダムマダムを連呼する

お銚子をかえて今夜は帰さない

遺伝でんなアと盃の手がふるえ

ひとり酌めばいみじくもまた秋の雨

飲み友達飲むまでケチなことを言い

紅灯のタベ

半玉に男ざかりの手をひかれ

姐さんの苦勞すなおに舞妓きき

男はんの悪口舞妓もついで言い

腹違い舞妓になつているという

ワテが通りまっせという歩きぶり

鏡台へ西陽のきつい屋形にて

狸寝と女将はとうに知っている

はしやいだあとの寂しさ妓にも

芸者の耳うち高いものになり

月ヶ瀬吉野長谷生駒仲居のスケジュール

スカンタコという声が大きい仲居部屋

首筋から風邪ひきそうに舞妓居る

段梯子女将眉間で何か言い

三味ひける姑で孫をよせつけず

舞妓がつけた渾名で旦那さん嬉しがり

内幕を舞妓が話す派手なこと

相場拳三つ指ついた妓と見えず

四 季

元日や素直に鼻をふかすなり

辰年年頭所感

竜頭蛇尾となる一年の計を樹て

四十七になつても正月よろしおま

日曜のちよつと大きいおらが春

ポチ袋ませた御礼を言われたり

義理がたい人に元日起こされる

ポチ袋芝居好みを伯母は見せ

唯々諾々と爛の追加も三ヶ日

お祝儀という数の子のケチなかさ

三ヶ日明治生れは寝るとする

蠅叩き一匹たたいて返事する

昼寝から起きてマツチをふみつける

応接間の金魚逆立ちしてくれる

御陵から御陵につづく彼岸花

鯉幟の尻尾が天気変えるなり

打水の滴りに立つ妻楊枝

寂光院コスモスの道菊の路

暗がりに梅の香と知る始発駅

遮断機の向うに信貴の花曇り

ラッパ飲みの彼方に湧いた雲の峯

平家村つめたい水の湧くところ

白砂青松夏だけ停まる駅という

急行の停まらぬ駅の良い桜

踏切の雪だけはいて火にあたり

老梅の孤独を愛す崖つぷち

陽が落ちてから来た水着よく泳ぎ

あほくさとも言わず炬燵を猫は出る

路郎忌や美濃の大八備後の亜鈍

地藏盆山盛りという供えよう

洗濯の雫へコスモス真つ盛り

花屑をあつめてボート屋暮れ残り

王手飛車かけて夕立ほめるなり

花びらをつついて鶏また歩き

桜藤躑躅と沿線あわただし

督促状と一緒に入った花だより

夏休みの学校蟬の鳴くところ

懸崖へ猫の尾がある良い日和

夕立は土の匂いをかがすなり

大屋根で隣の柿の熟れをほめ

夕涼み一人となって星を見る

初入選西陽気づかう位置にあり

貨車一つほととかれてる霜の朝

背泳へ入道雲は足の先

横町の雑音

青い灯のホテル夜霧にいきをつき

蚊柱の崩れて檢視五六人

靴磨き磨きたい靴前に行く

心配しましたで心配しましたでと義理の仲

すし捨を出てぽん引きと肩並べ

牛肉屋のおっさん理事の名刺くれ

鯨幕張り張り日本晴れをほめ

刑事室刑事自ら炭をつぎ

成金の趣味は日の出の軸に見せ

万引の哀れ子供のものの許り

持って死ねなんだらしい銀行から糞

税務署と言えばシャックリとまったり

ブラインド閉めたひととこ護送犯

大臣に紐がついてる阿呆らしき

まあまあ栄転の方だっしやろとは淋し

机へ脚のせてボーナスの話なり

有難い弔辞額にも入れられず

告別式おくれて哀れモーニング

見送りの時間をきいて遂に来ず

成人式知能指数にかかわらず

嘘ついて寝た夜の天井低いこと

死んでまで薨去卒去と段があり

男ごころ

籐椅子に猿又の紐ゆるう居る

ベレー帽どうですという冠りよう

本気にするぜと男の嬉しそう

人が悪いわ養子さんだっかいな

友遠方より来たるまた保険なり

借りに来た友とは妻にきかすまじ

七光りですと養子如才なし

養子会作る話もそれつきり

総辞職男をたてたつもりなり

女ごころ

女もう暴君でないが気に入らず

あの晩の風邪よと女嬉しそう

市電代返すにもめる女連れ

炬燵から女は櫛を拾うて出

朝の床ピンはパラパラ落ちるもの

ハンドバッグ迷える心パチつかせ

伊達巻の後ろ姿へ湖は暮れ

よどみなくお悔み婦人部長言い

化粧なおす後ろ姿へ喫う煙草

ヨヨと泣いておいて他人さんへ嫁ぎ

自信ある顔で三面鏡を閉じ

持ち味をいかす化粧の濃ゆからず

OKと派手に別れた戎橋

誘惑をせよと口紅アイシャドー

チト低い鼻でサービスゆきとどき

美容院から帰りあわてまいことか

待ち呆けさすには惜しい美人居る

お坊ちゃんねと女逆らわず

ネツクレス修験者程に巻きつける

コート着てからまた話しだす女客

女連れ一人はなれた器量よし

知らん顔して毛糸編みつづけ

ゆうべ来たらしい吸殻捨てている

袖丈に娘時代をなつかしみ

剃刀沙汰の女が通る春の雨

良縁かどうか嫁く身がいつち知り

かき眉毛みみずくという顔になり

占いにわてもわてもと女連れ

二号と後妻貯める話に馬があい

挨拶は指のダイヤを見のがさず

恋

恋人は刺客のようにより添うて

会ったのも中之島別れたのも中之島

愛人として角砂糖の数も知り

四十の或る日の恋は落ち葉踏む

四十の恋は手形を割って逢い

逃げ腰で四十の恋をしてるなり

暇と金 金と暇とが食い違い

折あらば隙あらばと中年のいやらしく

萬葉は綺麗に妬いているのなり

目くばせに哀れ五十の血があわて

月の縁団扇くるくる回すだけ

ボートも二人ベンチも二人中之島

情熱はいつそ無口にしてしまい

アバンチュール横町をぬけ路地をぬけ

愛の巢は隣の音もよくきこえ

雨傘を忘れて帰る術もござる

愛人はうなずくばかり砂の道

愛人の言葉のはしも暖かく

カステラと花束

お見舞へ付添い言葉添えるなり

病人の向うむいたをとがめまじ

七度二分見舞の客の好き嫌い

退院へ爪先ゆるい足袋をはき

お見舞に行けば一杯やっております

寝顔だけのぞいて見舞失礼し

検温器はさんで主治医趣味のこと

春になったらと病人も看護婦も

検温を潮時にした見舞客

食後すぐ薬のための飯のよう

北の護り

オーロラに煉瓦の街は哀しかり

馬上より指さす夏野ソ連領

姑娘の耳輪にふれる語らいや

空襲へ刺繍の靴は抱かれたり

鞭声粛々掖河を渡る鉄兜

野糞放るや大満洲の春の風

最後の味方

若う言うてくれた人を妻おぼえてい

ワイシャツを着かえることで妻ともめ

そうでっしやないかと女房逆らう気

遊走腎手術（明和病院にて）

病妻と別れる握手他人めき

手術二日女は化粧するという

手を貸せば纏足めいた試歩の妻

最後の最後の味方は妻なりき

弱味を見せるなと妻の眼が合図

流し目も上目も出来ず妻は老け

植木市妻は咲いてる方を買

倅ですともといじらしいことを言う

夜中まで待つて女房は叱られる

低血圧の妻の朝寝を咎めまじ

着せかけて帰りの時間きくは妻

酢昆布の匂いで妻にささやかれ

あつけない新幹線に妻不服

一男三女

長男誕生

初産へ神棚しかと灯をとし

タテヨコヨコ 子供の昼寝のたのもしし

内は役者が揃うています子沢山

子沢山蚊帳吊れば吊る騒ぎよう

感謝したりうるさがったり子沢山

叱言もう解り子供ら母につく

洗濯を手伝う邪魔も女の子

ポケットから出るたのしみへ子は並び

どちらにも似ず赤ん坊猿に似て

愛の結晶もう言うことをきかず

四人目を抱いて器用に飯をつぎ

両端は両親で守る蚊帳の裾

這えば立て 立てば歩めのカメラ向け

赤ん坊湯気のまんま抱き上げる

長女、三女昭和四十年十月に男子出産

ヨーイドン産声あげた孫二人

お砂糖のありかをかえる子沢山

ようきいときやと妹ついでに叱られる

つぎつぎに寝顔のぞいて俺の子だ

泣きやまぬ子へ倉の鍵がちゃつかせ

油断がならぬとは伴のことであり

子沢山どっちでもいける柄をより

医者 of 機嫌を損ねる程に親は訊き

次女の死

平均寿命四十年を残し娘逝く

肉親の嗚咽の中の釘の音

孟蘭盆会幸せうすき次女なりし

水 鶏 庵

鬼になりきれなかつた人生のたそがれる

八十五点という人生でありしよな

コツコツコツ出勤の猫背が硝子にうつる

水すましに暫し忘我の我でよし

牛の瞳に人間何をあわてとる

口八丁自分の恥もさらけ出し

リーダーともおつちよこちよいとも言われ

社長の性談古典落語めき

社長とは金融に走るものなるか

右書左楽音痴の俺は如何せむ

虞や虞や汝を如何せん四十八

キーホルダーと名がかわつても親父もち

還暦が自分であつた面白さ

後手後手と回る生活の五十年

小皺啣てば責任のある顔という

命ある句命ある句とて寝てしまい

優越感フト気がつけば一人なり

社長今日孤独の二字をかみしめる

出湯の窓乗鞍常念指呼のうち

エビフライ時価というのが気にいらず

落人部落成程という目鼻立ち

元軍人という礼をして借りてゆき

日本間の明るさにして梅もどき

古川柳の通りに指図風邪の妻

血圧を計りに来てる大三十日

駅弁の箸へ雪の立山真正面

まどろんで手形の夢とはあわれなり

バラ垣の主は戦争未亡人

伝書鳩のような夫となり果てぬ

かにかくにトレードマークとなりし髭

露天風呂月見草は手のとどくところ

夏休み指切り通り孫が来る

十日程こうしていたい宿浴衣

孫曾孫四十三人かこむ柩は祭めき

焼香順読み上げる声秋高し

陽気なおばあちゃんやったと一七日

新聞に埋もれている風邪の床

日本に箸紙があり祝い膳

襟を正すという言葉を会長今日使い

娘のグループへ父の下手なしやれ

生前にきかせてやりたい弔辞です

現代人よ埴輪の顔をとり戻せ

慇懃無礼検札起すなり

交渉はなだめ役を一人つけ

川端東雲楼氏居を訪ねて（富柳会）

矢印に曲り曲りて花の句座

近頃のスケールを女将かこつなり

鴟尾仰ぐ我の心の如何に小さし

聴診器一句案じているとは知らず

葬いの型を破れぬ村に住む

宿の朝蒸発組が喧しい

掛け替える軸へ紅白歌合戦

午前様になれぬを妻と笑う齡

起きる時間へ炬燵の温さ良い加減

空の旅インスタントのように着き

アパートの一軒だけが豆をまき

約束を破る電話は妻にさせ

桜堤臨時の駅のあるところ

なかなかに見せ場とならぬストリップ

道行の見せ場はアイと返事する

薬師堂まで来て引き返す宿の下駄

生け花をもってラッシュに迷いこみ

ステンレスのキッチンやっぱりこおろぎないてくれ

世界は二人のためにあり天高し

義理の通夜数珠をよみ人をよみ

暮からのこの楽しみの寝正月

腕組んだ思案を妻に見つめられ

クリスマスの星倅せうすき手で作り

星空を見上げる髪の良い匂い

イメージはマドロスパイプ手放さず

後釜はやっぱり弔辞読んだ人

春うらら雀縄とびしてるよう

残業の大きな影がよく動き

金儲けの近道元も子もなくし

信じ度し信じ度し金魚見つめて

昼寝場所いつしかきまる風の筋

掌に金魚の屍秋に入る

書齋哀れ艾の匂いこもるなり

つゆ草をコップにさしてパンの朝

秋爽涼思わず言うて髭を剃る

小包は疎開の里の柿のかさ

見い出しとマンガだけみて朝を出る

結局は大島にして古都の秋

支那栗の袋そのまま母眠る

七五三ゲバ振る子になるとは見えず

一席のニュース写真のむごいこと

十二月フルカウントとなりけり

中小企業持ち駒のない十二月

元日の書斎水仙の黄に対す

ベルを押す手許たしかに午前二時

正月の花の話で嫁姑

腕組んで回す手形に割る手形

香奠の相場も上がったなと包む

無欲になれば判断誤たず

胸に花今日は葬儀委員長

午前二時城下の誓いさせられる

初恋の思い出はがゆいことばかり

艦隊の出動めきて鯉の列

釣人を傘きってみてる出湯の橋

あてておみやすと女将あてさすことがすき

シヨベルカー堇の花をすくいあげ

支那墨の香りうれしい俺の城

あととりがだんだん長い顔となり

気骨稜々はうつらぬレントゲン

老妻の日傘の派手をとがめまじ

ぬすみたる唇熱きこと熱きこと

浴衣着て初恋というものありしかな

寄付帳へ眼鏡かけたりはずしたり

水鶏庵の風鈴廂の高さより

好事家の遺品に家族チト困り

囲まれて母ちゃんまりと月見する

名月や重なる団地古城めき

藤井明朗氏還暦

幸福は趣味で喜ぶ赤頭巾

印度ムルタンの壺を贈られて

ムルタンの一徹の瞳の輝きを思う壺

三ヶ日孫六人の渦の中

元旦や酒禪一味の心知る

母者人炬燵のかきの尊とけれ

歸り来て炬燵の母と対いけり

清水白柳氏謹悼

菊の香に哽せたまいし応えなし

二日から書斎の癖をとりもどし

夫婦でも自慢話はききづらし

雁かりがねの絵をかく如しタクト振る

軽い躰へ毛糸編みつづけ

何者だという顔でいるグリーン車

やっと二人になりましたひかり号

啓蟄の誕生日なり虫に似る

投函の帰りの途の一杯さ

蟹の身をせせて故国の雪話

公害も煙たなびく程はよし

幻や菜の花道の夕まぐれ

香港マカオ行

団体の我が年頃に似た夫婦

足腰のたつ間という旅だより

母のせてマイカー制限時速なり

蜘蛛の囀を蜘蛛ゆさぶって蜘蛛も暇

旧友に歯科医のいるを思い出し

釘箱の釘大きすぎ小さすぎ

夕焼けに白壁の街落ちつかせ

天平の屋根そり返る秋の雲

印相まで気にする程の不倖せ

浜風にネッカチーフがよく似合い

栗ごはん囲炉裏の部屋で食べてよし

栗ごはん嫂の在所をたずねられ

栗ごはん遠くで発破の音がする

寄せ書きは横書きたて書き斜め書き

卓上の花もゆれてる大笑い

カウンターに懸崖の菊あり集金日

髭の社長菊の一鉢約束し

正論が末席から出て座が白け

放心の元旦にして酒旨し

元日や米寿の母を囲む幸

元旦や我泰山の如く座す

六疊は我が城にして黄水仙

寄せ書きが円陣となる良い仲間

テトラポットあざらしに似て冬の海

もういっぺん欺されましようと言妻が言う

お愛想で訊いた話をくどうされ

煮凝りは病気の母の口を逃げ

夫婦円満女房上位とはいわず

脱サラリーマン地下の喫茶がふと恋し

画廊出て興奮気味を冬木立

豆もろこ酒仙とまではならぬ我

満ちたりた舌山菜をほめちぎり

信玄のかくし湯ときく朧月

火元がわかって屋台飲みなおし

石段は記念写真を撮るところ

道連れが一駅違う駅で降り

音痴もうここまできると拍手もの

母の日の米寿の母は家宝めき

神楽囃子墨絵のような森があり

夕月に誘われて出て恋でなし

二階から都会の顔の妻籠宿

漫才師電車の中で目をつむり

床の間の置物めきて母米寿

胸にバラ米寿の母は素直なり

めでたさは米寿の母が飲んで献し

せんば言葉で母は米寿の謝辞を言う

処女!! 他人には美しい言葉です

禅寺の蕤の反りの蟬時雨

祝還暦堀江正朗氏

まだまだこれからという握手

漬物がいつちおいしい老夫婦

白玉にまされる侘もて余し

読初めや句集旅人福寿草

夜長よし女房の趣味俺の趣味

一文にもならぬ川柳と妻は言う

ひそひそと話して親娘笑いだし

団交の日の短さをしかと知り

落人の耐えに耐えにしわらべ唄

鳥籠の鳥に小首をかしげられ

ストリップどんなリズムでも踊るなり

この期に及んで人參だニンニクだ

読者欄ここから活字小さくなり

たどたどしい日本語の詐欺にあい

男の指輪その人格を疑えり

祝 緑之助氏の句碑建立

出雲路の神話の句碑に風薫る

島の灯を指さす肩は抱きよし

ええとしをしてといわれた好奇心

母八十九歳心臓麻痺で死去

遮莫上手に母は逝きにけり

臨終のない死に死水あわてたり

堪えに堪えし嗚咽の堰の別れかな

灯明の奥に母あり梅雨の室

晴れやらぬ梅雨の心を今日も持ち

公害のないところへ母は逝きにけり

滝の音きこえてからの径けわし

葵水氏御母堂告別式に参列して

香煙に御影やさしく笑み給う

何か言うていないと淋しい生れつき

あの頃はやさしかったと妻は言う

働いた色で夕陽も沈むなり

母
歿し

お土産を買う楽しさが一つ減り

刀痕の柱の部屋の暗いこと

名産をほめりや朝昼晩と出る

膝を抱く癖も恩師に似てきたり

点と点つないで企画部長室

異色作家時々警察へも呼ばれ

吉報をフンフンフンときく書斎

ある距離を置いて師弟のつつがなし

暗然と拳を膝に通夜守る

約束をとぼける芸を社長もち

鴟の贅蛙泳ぎのまま蛙

母逝きて鋏の鈴とする対話

正座して墨する部屋の桜炭

能登にて

着ぶくれて塗師の無口とがむまじ

春や春揚羽の蝶の時国家

たのもしい後輩があり縄のれん

いささかの旅愁となった通り雨

宿の下駄うまいコーヒーないと知り

嫁と呼ぶ垣あり若く美しく

白羽の矢それから愛の鞭厳し

九月七日吉川英治忌

雨につけ風につけ亡母のこと雉子郎忌

笑い合は貧しきでなし雉子郎忌

ほほずりのハリスの髭は獣めき

柿崎へ通うお吉に鳶の輪

ろうけつ染ののれん女主人の声やよし

舌出した噓げんこつの真似ですみ

貫禄は血压言うて先に去に

旨い河豚へ案内します娘婿

何事もなかった顔で二階下り

今日という今日女という名が哀し

感謝していますとも妻の口答え

やわ肌の血潮を聴診器にきかれ

悼福島鉄児君

黒リボンの額を見上げて対話なし

信州路にて

靴の雪地団駄踏んで落してる

雛の目の初恋人に似て楽し

活動家とも出しゃばりとも言われ

隠岐吟行

逝く春や遠流の島の駅の鈴

御所二つ今も悲劇の帝たり

この家並ま昼を通るもと廓

倉庫番海に扉を開け放ち

水軍の根拠地なりし海鼠壁

さりげなく道を訊ねる美人選り

板尾岳人君へ

雪月花金剛山は奥座敷

金剛山の岱岳人の声である

正弁丹吾父娘と見えぬ箸を割り

ネクタイだけ黒にしてゆく小さい義理

かき氷ここらあたりはもと廓

せつのうてせつのうてサングル履きで来

酒ぐせを長女にまかしみんなたち

ゆんべのおかず仲々思い出せぬこと

珍品を集めて至極真面目なり

元旦の一步国旗を掲げに出る

長生きも芸のうちなり秋叙勲

雰囲気を和らぐ蜜柑くばられる

ケーブルの視界広がる初詣で

会長のうまい冗談招ばれ酒

舞わぬ羽根やっぱり母の息で舞い

レイかけて夢のハワイよ詩の島よ

波のりの背に夕陽の素晴らしく

観光団曾遊の一人よく喋り

屋根に落ち屋根より落ちし猫の恋

執念の人ときいたが肥えている

雛の絵の葉書で雛に招かれる

ナツメロヘバーのマダムの二重頤

ご鞭撻などとは就任した当座

重文の兜の部屋の昼暗し

十二神将ハッタとにらむ瞳と出遭い

春の雨博物館の小半日

血圧にさわる放談して帰り

針の数よんで布団は出来上り

記憶がありませんと男の返事なり

五十音で先に呼ばれた男なり

一瞬にきまる勝負が男好き

船渡御にせんばは鱧を焼く匂い

書斎とも座敷牢とも梅雨の部屋

逢うて来て口数少ない受返辞

じつとしてやと頬っぺの蚊を打たれ

OL貴族というクーラーの部屋である

姉弟も二人となりし墓参り

終点から十キロもある現地ルポ

温泉の音頭八十作雨情曲

脇役の名技をほめる記事小さし

支那服の似合う才女で羽田発ち

乾杯へ日本大使背低し

シャンデリアここはお寺の応接間

炉辺話狐の愛情聞かされる

身体から空気がぬける受話器置く

イヤリング自分ではずす独り言

不思議やなあ不思議やなあと妻思い

ライバルの風邪天罰のように言い

引越しの応援花瓶を一つ割り

御題 海

おおらかな海元旦の酔い心地

悼岳人君の嚴父御逝去

金剛山揺るがす程に哭いてよし

柚子の里

山陵に詣でる我は甲斐源氏

ホツホツと柚子の香りの句座にあり

花の命そんな言葉で逢うている

踏切りの一番あとから乳母車

梅見バス軒につかえる町を抜け

土鈴買う音あれこれや梅の宮

あっけなく入院初夜を眠りけり

又来ます握手の妻は他人めき

見せてから包丁入れる明石鯛

駅を出る五百羅漢は定期持つ

霧の道軍歌は腹がへっている

青麦に雲雀が生まれ雲生まれ

桜吹雪一人歩けば主義もなし

補聴器でホトトギス聞く趣味の会

祝 久米雄氏受賞

久米人の握手の詩のあたたかさ

花いっぱい運動の東伯町にて

菊の奴菊の主となりにけり

点滴を機に見舞は腰をあげ

抜剣の姿で銀将おどり出で

ナイターに六甲山の稲光り

のむ話になって見舞もほっとする

のろけてるうちに氷菓子はとけ

うみなりのいよいよ高し茗人忌

竹原川柳会二十周年

情熱は未来へのびる竹の青

末席は上手に正信偈をあげる

鈍行の気になる一人サングラス

奥飛驒の鮎の逆立ち炉辺ぬくし

民宿の鮑コリコリ音がする

聞き上手一寸真顔になってやる

いなきも中位なり古稀の春

幻の邪馬台でよし炉辺話

潮流に乗って来た国四季の国

引潮の錨の上を蟹が這い

月光に抱けば濡れているまつ毛

流人史に島は椿の花盛り

花の下河内言葉を丸出しに

すゝむ忌や帽子の人が一人居る

カレーライスの一片の肉何時食べる

単身赴任味付海苔が味方する

拗ねているうなじはほのと匂うなり

お互いに考えましょう波の音

喫茶店の隅で小さい儲け口

二代目を継ぐ産声をしかときく

こけしにもあつたこけしの好きな柄

借りに来た人情論の得手勝手

随筆の才女和服の似合う人

祭り客碁客になってしまいけり

辛抱を船場でしました紺のれん

ボーナスは妻の入歯にもってかれ

髭が泣きまっせという値切りよう

物心母の泪を見てしまい

和顔愛語元旦の心しる

駅裏の十歩余りの歳の市

信濃路より越後路へ

商魂は藤村焼酎駒子餅

何にでも効く温泉へ目をつむり

損得をいうから男見くびられ

水取りがすんでからという法事

啓蟄や今日はも古稀の誕生日

膝抱いて暮れるに遅き春ぞかし

ハミングで春の小川は堰を下り

原稿紙の白さに耐えている夜半

夕陽ヶ丘藤原家隆の墓

日想観家隆は深く手を合せ

路郎師第二句碑にて

一人ずつ渡る板橋句碑の風

やさしい声の電話油断なりませぬ

高額所得者に同名が居る読みなおし

短冊にのる字で伝言板を書き

ライバルの祝電もよし披露宴

パジャマにもポケットがあり何入れる

お知恵拝借とは格好の良い言葉

空蟬や我七十の掌に

炎の如き言葉を吐いて淋しけれ

友だちが寄ると会の名が出来る

夕ざくら我七十の血の騒ぎ

喫茶店喪の腕章をはずしあう

筆まめの様という字がきまつてゐる

元旦や七十年の猿芝居

長生きをしてねとわかつてきたらしい

湯豆腐を掬う夫婦を軽く妬く

日本人軍艦マーチでよく遊び

籠をあむ手元を冬の陽がかげり

秀才の家系に生れクリスチャン

潮騒の今はきこえぬ晶子の碑

七つ目の判で止まっている役所

血圧にわるい女といわれてる

二条駅燕ひるがえりひるがえり

金魚掬う金魚の柄の浴衣着て

おはぐろとんぼ川の流れに逆らう気

忘れることが幸福とはみじめ

ハーケンを打てば湧き出る雲の峰

ある反発早稲田の文科中退す

古本屋の棚のほこりに意地があり

蒔きおわるまで鴉鳴かないことにする

話し声大きくなってきた夜道

ついに来た法師温泉虫の秋

碧の名の額あり冬の湯治宿

行灯に夢幻よ法師の湯

落語家の崩れた顔が今佳境

落語家の真面目な顔の死亡記事

堀沿いに二頭並んだ雨の鹿

ここのところを口三味線で舞う師匠

古都の隅先祖ゆずりの職に生き

糸底を撫でつつ話す去年今年

落ち合うはジングルベルの鳴るところ

陽のあたるプラットホーム向い側

三ヶ日ホーム炬燵の酒仙かな

自動ドア出て北浜の春の昼

戎橋一寸そこまでの人に遭い

ばてぢゅうでテコのさばきの孫娘

てっちりや路郎門下の生き残り

雛の鼻よくよく見ればあるのなり

大丸で逢い福寿司で遭う女連れ

木の芽和え文楽好きな母なりし

野仏のところを得たる登山口

俄遍路スケッチしたり拝んだり

月朧遍路日記もそこそこに

船遊びユラユラ沈む落しもの

船遊び今鳴る鐘は大悲閣

船遊び千鳥ヶ渚で二人降り

方言をまねて度を越す旅の酒

金剛山へ五〇〇回登る莫迦でよし

登山靴の紐しめなおす五〇〇回

養毛剤のおろかしき値を信じ

異性無視そんなたのしいことをする

天皇の傘寿にあやかる今日の幸

ダイヤ婚さてこれからののみ直し

新幹線隣は何をする人ぞ

会果てて本屋へ回る連れがあり

三十のときめき結婚詐欺に会い

結び目がほどけかかっている絆

辞世句を八十五歳で捨て台詞

わが命いじらし歳時記はきびし

何もおいてないのが社長の机とか

初節句朝から来てる里の親

ささやきに塔の影ある古都の池

鳩一羽塔の高さも翔んでみせ

見事なる落椿武蔵の墓どころ

ここまでおいで観音さんは山の上

宴会で漢方薬のメモをとり

自由業と書いた所得の桁違い

へんたい仮名の一字が読めぬ道しるべ

兄弟に思い出があり蟬の籠

妻の背が母の背となる針仕事

百度石整いすぎし目鼻立ち

多久志逝くはや朝蟬の騒がしき

菊の句の除幕目出度し菊日和

古稀とかや一步退く事に慣れ

塔一つ大和の冬を広うする

子^{ぼう}子^{ふら}に意見をきけば沈みけり

カラフルな薬並べて七十三

元旦や七十三歳うけてたつ

元日のガスメーターはよく回り

日の丸やここに明治の人が住む

建国祭の国旗はためく風きびし

森田たまの随筆を借りたままである

暖房のようきく部屋の遊びごと

大川端柳の風で暮れてゆく

もの書きの妻叱られて叱られて

竹を踏み喧嘩のつづきをする夫婦

菖蒲湯の菖蒲枕に老いの顔

ステッキをついて焼香の止めに立ち

女曰く波の音をきいてますの

摘み草の腰をのばせば揚雲雀

舌打ちをするしくじりも古稀なりし

羊飼いの少年になりたいと思う夕陽

呑み友達どちらも髭をはやしてる

酒も匂も子供も愛する無鬼菩薩

路郎忌やビールのあてはうざくなり

いつしかに膝抱く姿不死鳥忌

扁額は書斎けうとし不死鳥忌

水打って端居の微醺不死鳥忌

老妻は浴衣我はステテコ不死鳥忌

細雪だんごの皿を二つ置く

蠅の止まっていただんごをくれるなり

紫陽花や色即是空昼の雨

紫陽花の美事な変身我愚直

マンシヨンの母の遺影に桃一果

マンシヨンに旅の一句がかけてあり

喜寿やよし生かされました句集なる

憎さも憎し礼儀正しいライバルで

香煙縷々としてライバルが逝く

初旅や車中の声は雪の富士

初旅や伊豆は菜の花豆の花

ライバルの頭仲々禿げてこぬ

麗人のロマン「徹子の部屋」できく

どこやらに自慢がまじる嫁の里

牡丹や我も湯客の一人なり

我が心おぞまし牡丹の前に佇つ

一人一人話せばみんないいお人

つまらないことおぼえている女房め

主人みずから出すは冷蔵庫のビール

インタビューしようむないことをきくものぞ

くっしやみの出かける顔を見たりけり

スケッチの見上げる空は既に秋

蘇州哀しいずこも同じ水濁る

虎丘仰ぐ斜塔にかかる雲ゆるる

秋暑し魯迅の像はまばたかず

蓮の花一会の旅は続くなり

塔あれば影　人あれば旅の影

十二月舞台は紙の雪が降る

引退のそれから名の出た趣味の道

旅だより港の雨を書いている

旅やよし地酒につづく囲炉裏酒

義理を欠くのが風邪の予防とか

李白一斗杜甫一斗の酒の詩

温泉で手形の指図するもよし

阿呆になつときなはれという母があり

仮面かぶつてゆくとは策のない話

月おぼろ背中合せの生返事

父の日のいでたち娘のプレゼント

金婚や河内茶粥と梅干と

枅酒の昂りもよし喜寿の宴

秋晴をたたえて哀れ病み上り

夫唱婦随そんな古さの共白髪

ボーナスの入歯の順も共白髪

明治大正昭和を生きて共白髪

共白髪竹を踏み竹を踏み

サラ金もギャンブルも知らぬ共白髪

五十年上手に負けて恙なし

生々庵追悼 二句

偉人逝く春の嵐の吹くなかに

薬など盛らぬ名医の叱る声

引金をわたしが持っている誇り

其^{まの}も焚けば七歩の詩が出来

桃の花孤独の顔はなかりけり

桃の花解脱の僧の色話

桜草水のせせらぎきいて咲く

風蘭や御僧の挨拶掌を合せ

風蘭の香に酔う話佳い話

女やからゆるさんと女が言う

口答え一つ失う耳飾り

信貴の影ふみつつゆけり時雨の忌

かくれ家にポケットベルが鳴りひびく

内縁という深い情けをもつ女

十二月邪魔なところへ人が佇ち

たたらふんでふんで十二月

薬漬川柳漬の余生かな

初詣で御菰樽にも手を合せ

初詣で和顔愛語のご挨拶

丹前や七十八歳人嫌い

新年の挨拶塵紙交換氏

子供部屋静かに爆弾作ってる

伯母と叔母畳の部屋へ来て話し

エッセイスト手櫛で白髪かきあげる

鳴き竜の音のひびきも初詣

新年会嘘の初めの御挨拶

餅食べて死んだ話も小正月

「こんなふうになんて死にたい」本を読む二月

大寒の温さをいうて飲みに行く

肩抱いて運河に添うてゆく夜霧

希望します陛下のお声重々し

清貧を貫く師父の詩心

自在鉤昔庄屋の旅籠かな

旅愁とや自在の囲炉裏囲みけり

J Rの駅長若し旅終る

落武者の逃げ水に遭う草いきれ

金メダル家に中風の父が待つ

お浄土へ一筋道の秋の風

朗報や山茶花咲いた今朝の晴

家中で見る新聞の受章欄

コスモスや祝電のベル鳴り止まず

紅い靴一番安い肉を買う

豊明殿妻と伺候の菊日和

記念写真お車寄せの広さかな

豊明殿しずしずと行く臣栞

黒髪のなげきも源氏物語

玄関で嫁の言葉のゆきとどき

漫才のネタを国会今日も出し

ゆずられた席であくびが出て困る

おばちゃんは弱い方へつきたがり

一万歩歩いて二杯飯を食う

大寺の円柱に佇つもの思い

親子とや「タダイマ」の声間違える

路郎語録高野の奥の蟬時雨

川柳塔の下千万の虫の秋

熱燭や高野の塔に雪しきり

春の風川柳塔にふれてみる

おいしいコーヒ―狭い階段のぼらされ

鬚剃った顔ほめてくれ笑うてくれ

北の島を時々思い出す政府

無人駅を発って無人駅に帰る

後添いのとても明るい笑い声

ボジョレヌーボーで明るい部屋にする

焼香順まだ納まらぬ伯父が居る

老いの坂上れば花の奥の院

老いの坂振るステッキに風みどり

釣り花や言葉すくなのおもてなし

百合活けて気配り多き立居かな

藪柑子故里近き暮の道

男子厨房に入っている機嫌

独り居のたそがれ時を藤の花

スッポンの粉効いたとも効かぬとも

うちわ撒き破れたのをかざしもち

野良犬が倉庫の裏をはなれない

グルメとや蛇に蛙にかたつむり

すぐ弾む心欲求不満かも知れぬ

こんなことで喜ぶ父は八十五

弓始め木履の音も春のもの

百までも生きる努力をする八十路

三面鏡の一面にある火の眼

どぶろくはコタンの笛をききながら

鳩居堂出て八坂の塔のおぼろかな

カンナ咲くわが血の音をきく如し

菜の花の暮れずにおわす野の仏

玄関にソクラテスの妻が立っている

天平の菫尊し春の星

大寺の鴟尾仰ぐとき歩を正す

大寺の灯ともし頃を浄土かな

郡上八幡義民の誓い傘の陣

バスタオル巻いてハイハイという電話

ポケットベル会議中退堂々と

受付でどなっているのは父の声

文楽から泣いて帰って茶漬食べ

クーラーに鼻つまらせた老夫婦

文字読まぬ今日一日の不倖せ

あっちむいてホイというように簡単にゆかぬ

順風満帆 栄誉たたえるよい言葉

成功は網走日記書いてから

陰膳のお箸に母のひとり言

箸を拝んで母のこと父のこと

笥からそそぐ温泉雪しきり

鳩居堂墨のコーナーにあるしじま

皇室の写真笑顔に声がない

ロマンスもなく国境の駅を発つ

草虱つけてもどった万歩計

寝転んでP K O っ て何だっけ

花曜 酔曜 黙曜とて盃をもち

ふつふつと葱とどじょうの仲の味

窓際の椅子だんだんと人嫌い

欲すてて精神安定剤をのむ

紀子様が着ると流行色となり

瀬祭の片肱枕子規の城

漱石の城代家老無位の猫

鶏頭の十四五本もあり子規の城

P K O 陛下は何と仰せです

ものすごいやんかギャルにとりまかれ

恋文を扇子で書いている小朝

角さんの扇子の風の機嫌かな

送り出す妻の言葉を大切に

魯山人の器にもった茄子の色

ここまではすらすらとゆく詰将棋

老夫婦鬼も逃げない声でまき

豆まきは孫にまかせて炬燵に居

得手に帆をあげたまんまの過労死か

舌鋒と舌鋒 枝豆食べながら

弊衣破帽 腰の手拭デカンショ

はなれ小島のように気高くいる女

山寺の一夜こんにやく問答など如何

まぐれあたりだんがなと大阪弁でよし

お師匠さんに習うたのは女癖

雑巾の一目一目を射す冬陽

太陽に我八十の肋骨

黄昏の交番さんま焼いている

更年期の会話薬局から戻り

落葉掃くもう人間にあきました

子規八雲 良い横顔で笑わない

命とや紙一重の震度七

大家族母に残したとろろ汁

命の恩人へいつしか賀状だけとなり

あほくきとも……………六一
阿呆になつとき……………一九四

あほくさとも	六
阿呆になつとき	四九
雨傘を	八〇
雨洩りの	九九
雨につけ	三八
有難い	六七
ある距離を	三六
ある反発	七〇
暗然と	三六
行灯に	七三
案内は	三〇
(い)	
唯々諸々と	七五
家中で	四四
家出の	三〇
筏乗り	四三
生け花を	五五
意見する	二二
いささかの	三七
石段は	二六

医者の	………	三	命ある	………	六	内は役者が	………	八
異色作家	………	一三	命とや	………	三三	内幕を	………	五
偉人逝く	………	一六	命の恩人	………	三四	打水の	………	五
椅子は	………	一四	今更に	………	三	うちわ撒き	………	二二
出雲路の	………	一三	イメージの	………	元	空蟬や	………	一六
異性無視	………	一七	イメージは	………	一七	腕組んだ	………	一六
一二駅	………	四	イヤリング	………	一五	腕組んで	………	二
一年を	………	四七	慇懃無礼	………	二〇	旨い河豚へ	………	四〇
一万歩	………	二六	印相まで	………	二三	うみなりの	………	一七
一文にも	………	二九	引退の	………	一九	梅見バス	………	一四
いつしかに	………	一八	インタビュ―	………	一九	占いに	………	一
一瞬に	………	一四	〔う〕	………	一八	孟蘭盆会	………	一
一席の	………	二〇		………	六	うりざね顔	………	三
一匹の	………	四	植木市	………	六	〔え〕	………	三
一筆の	………	一七	受付で	………	二四	ええとしを	………	一三
一步出ずれば	………	四〇	羽左に似た	………	一五	駅裏の	………	一三
出湯の窓	………	九	牛の瞳に	………	九四	駅弁の	………	九
遺伝でんなア	………	五	右書左楽	………	九五	駅を出る	………	一五
糸底を	………	一三	うす糊が	………	一七	エッセイスト	………	二〇
いななきも	………	一五	嘘ついて	………	六	得手に	………	三三

絵葉書は	………	三	大屋根で	………	三	お銚子を	………	五
戎橋一寸	………	一五	おおらかな	………	一五	おつうじの	………	三
エビフライ	………	七	オーロラに	………	八	男の指輪	………	一三
襟を正す	………	二	起きる時間	………	一三	男はんの	………	五
宴会で	………	一八	奥飛驒の	………	一五	鬼になり	………	九
(お)	………		送り出す	………	三	おはぐろ	………	一七
お愛想で	………	二四	O K と	………	七	おばちゃん	………	二六
おいしい	………	二八	おごられる	………	九	伯母と叔母	………	二一
老いの坂上れば	………	二九	お砂糖の	………	九	お坊ちゃん	………	七
老いの坂振る	………	二九	お祝儀と	………	五	おまえ使うて	………	元
応接間の	………	五	お浄土へ	………	二四	お見舞に	………	八
会ったのも	………	七	お師匠さん	………	二三	お見舞へ	………	八
逢うて来て	………	一四	お互いに考え	………	一六	お土産を	………	一四
王手飛車	………	三	お互いに中毒	………	四	お向いと	………	三
OL 貴族	………	五	落ち合う	………	一七	親子とや	………	二七
大川端	………	一四	落人の	………	一三	親子二代の	………	七
大阪弁で	………	四	落人部落	………	七	折あらば	………	六
大寺の円柱	………	二六	お知恵拝借	………	一六	俺は独酌	………	二四
大寺の鴟尾	………	二三	落葉掃く	………	二三	温泉で	………	一三
大寺の灯	………	二四	落武者の	………	二三	温泉の	………	一五

228

元日や米寿	………	一三	菊の奴	………	一五	牛肉屋	………	五
感謝したり	………	八	紀子様が	………	二八	旧友に	………	二〇
感謝しています	………	一四	気骨稜々	………	二三	兄弟に	………	一八一
艦隊の	………	二三	喜寿やよし	………	一八	鏡台へ	………	五
元旦の一步	………	一四	着せかけて	………	一七	姉弟も	………	一五
元旦や酒禪	………	一六	北の島	………	二〇八	今日という	………	一四〇
元旦や七十三歳	………	一八	帰朝者	………	一〇	義理がたい	………	一五
元旦や七十年	………	一六	喫茶店の隅	………	一六一	義理の通夜	………	一〇六
元旦や我	………	二三	喫茶店喪の腕章	………	一六七	霧の道	………	一五
カンナ咲く	………	二三	吉報を	………	一三五	義理を欠く	………	一九三
乾杯へ	………	一五	記念写真	………	二〇五	金魚掬う	………	一七〇
還暦が	………	一五	城崎の雪	………	四	金婚や	………	一九四
貫禄は	………	一三	木の芽あえ母	………	一八	金メダル	………	二〇三
〔き〕			木の芽あえ文楽	………	一七五	〔く〕		
キーホルダー	………	五	着ぶくれて	………	一三七	水鶏庵	………	一四
記憶が	………	一四	寄付帳へ	………	一四	空襲へ	………	八四
聞き上手	………	一五	希望します	………	二〇三	姑娘の耳輪	………	八三
帰郷して	………	一六	鳩居堂墨の	………	二六	クラーに	………	二五
菊の香に	………	一六	鳩居堂出て	………	二三	釘箱の釘	………	二〇
菊の句の	………	一八	急行の	………	六	草虱つけて	………	二七

倉の鍵	暗がりに	虞や虞や	蜘蛛の罟を	久米人の	首巻を	首筋から	首洗池	靴磨き	靴べらは	靴の雪	くつしゃみ	口八丁	口答え	薬など盛らぬ	薬漬川柳漬	鯨幕の上に	鯨幕張り	郡上八幡	草の名で
.....																			
三〇	五九	五九	一九	一五	三三	五四	三三	五五	三四	四二	一九	四四	一九	一六	一九	一八	五五	二四	四三
血圧にさわる	化粧なおす	敬老敬老	ケープルの	鶏頭の	啓蟄や	啓蟄の	芸者の耳うち	刑事室	君づけで	桑の葉を	黒リボンの	黒髪	暮からの	グルメとや	クリスマス	栗ごはん遠くで	栗ごはん囲炉裏	栗ごはんの在	栗ごはんの在
.....																			
一四	七三	三三	一四	二九	一四	一八	五	六	七	六	一四	一五	一六	二一	一六	三三	三三	三三	三三
公害のない	香煙縷々と	香煙に	恋文を	恋人は	鯉轍の	現代人	健國祭	健康法	原稿紙	玄関に	玄関で	懸崖へ	検温を	検温器	月光に	結局は	血圧を計りに	血圧にわるい	血圧にわるい
.....																			
一三	一八	三三	二九	七	五	一八	一五	五	一五	二三	二五	三	三	三	一五	一九	九	一六	一六

公 害 も		一八	こ こ ま で お い で		一八〇	五 人 目 の		三
高 額 所 得 者		一五	こ こ ま で は		三〇	娘 の グ ル ー プ		一〇一
孝 行 の		四	心 得 た 女 中		三	こ の 期 に		一三
皇 室 の		二七	五 十 音 で		一四八	こ の 家 並		一四三
交 渉 は ギ ヴ		二六	五 十 年		一六	琥 珀 色		三
交 渉 は な だ め		一〇三	御 所 二 つ		一四三	ご 鞭 撻		一四七
好 事 家		一五	小 皺 唧 て ば		九六	ご 陵 か ら		五八
皇 太 子		三	コ ス モ ス や		二〇四	金 剛 山 の 笏		一四三
香 奠 の		二一	古 川 柳 の		九	金 剛 山 揺 る が す		一五三
コ ー ト 着 て		七五	午 前 様 に		一〇三	金 剛 山 へ		一七六
更 年 期		三三	午 前 二 時		一二三	こ ん な こ と で		一二一
幸 福 は		一五	子 沢 山 蚊 帳		八	こ ん な 字 を		一三
古 希 と か や		一八三	子 沢 山 ど っ ち		九三	こ ん な ふ う に		二〇三
虎 丘 仰 ぐ		一九	炬 燵 か ら		七	(さ)		
御 近 所 が		三	小 包 は		一〇九	最 後 の		六
告 別 式		六	コ ッ コ ッ コ ッ		九三	孟 に 島 の		三
こ け し に も		一六	後 手 後 手 と		九六	桜 草 水 の		一九七
苔 は や す		三	事 毎 に		二	桜 堤 臨 時 の		一〇四
叱 言 も う		八	古 都 の 隅		一七三	桜 藤 躑 躅 と		六三
こ こ の と こ		一七三	子 供 部 屋		二〇〇	桜 吹 雪		一五

酒ぐせを	………	一四	市電代	………	七
酒の勢い	………	一六	自動ドア	………	一七
酒も匂も	………	一八	支那栗の	………	一九
細雪だんご	………	一七	支那墨の	………	二三
ささやきに	………	一七	支那服の	………	一五
差し押さえ	………	一八	鴉尾仰ぐ	………	二三
札束を	………	三	島の灯	………	一三
悟れる如く	………	三	寂光院	………	一五
遮莫上手に	………	二三	遮断機の	………	一五
サラ金も	………	一六	社長今日	………	一六
皿割った	………	二	社長とは	………	一五
さりげなく	………	一四	社長の性談	………	一四
三階の	………	四	三味ひける	………	一四
三ヶ日ホーム	………	一七	シャンデリア	………	一五
三ヶ日孫	………	二六	自由業と	………	一八
三ヶ日明治	………	一七	秀才の	………	一六
残業の	………	一七	終点から	………	一五
三十の	………	一七	姑は半分	………	一三
三面鏡の	………	二三	十二月邪魔な	………	一九
山陵に	………	一五	十二月舞台は	………	一三

十二月フルカウント	二〇	書齋とも	一〇	新聞に	一〇
十二神将	一四七	処女	二六	辛抱を	一六
執念の	一四七	シヨベルカー	二三	しんみりと	三
十八人の	一六	白樺の	元	(す)	
重文の	一四七	白玉に	二九	水軍の	一四三
手術二日	八五	白羽の矢	二九	随筆の	一六三
主人みずから	一六	白骨の湯の	四	吸物の	三
酒仙とも	四	知らん顔	七五	スーツケース	元
順風満帆	二五	城跡から	四	末ッ子に	一四
正月の	二一	路郎忌やビール	一八	スカンタコ	五
焼香順まだ	二九	路郎忌や美濃の	六	すぐ弾む	二一
焼香順読み	二〇	路郎語録	二七	スケッチの	一九
上求菩提	四	新幹線	一七	酔昆布の	七
商魂は	一六三	信玄の	二五	すし捨を	五
情熱はいっそ	七九	信じ度し	一〇八	すゝむ忌や	一六
情熱は未来へ	一七	人生四十	一五	雀の涙	六
菖蒲湯の	一四	死んでまで	六	スタミナ	三
正弁丹吾	一四三	新年会	二一	スツポンの	二〇
食後すぐ	八三	新年の	二〇	ステッキを	一八四
書齋哀れ	二八	心配しました	五	ステンレスの	一〇五

脱サラリーマン	……	一四	近頃の	……	一三	机へ脚	……	七
伊達巻の	……	三	父の日の	……	一四	漬物が	……	一九
タテヨコ	……	八	秩父丸	……	二〇	燕翔ぶ	……	四二
たどたどしい	……	一三	チト低い鼻	……	七	壺焼へ	……	四三
たのもし	……	一七	茶と萁	……	一四	妻の背が	……	一八
旅だより	……	一五	茶屋酒が	……	五	つまらない	……	一六〇
旅枕雨	……	四	茶碗一つ	……	元	摘み草の	……	一八五
旅や旅	……	七	中小企業	……	二〇	つゆ草を	……	一〇八
旅やよし	……	一五	中風を	……	元	釣り花や	……	二〇九
狸寝と	……	五	聴診器	……	一三	釣人も	……	四三
誰にきいても	……	六	潮流に	……	一五	釣人を	……	一二三
団交の日の	……	一三	珍品を	……	一四	低血圧の妻	……	八七
短冊に	……	一六	(二)	……	一七	デカメロン	……	一四
団参の	……	四	ついに来た	……	一七	手提袋	……	一八
男子厨房に	……	二〇	月おぼろ	……	一四	てつちりや	……	一七四
单身赴任	……	一六	月朧遍路	……	一五	掌で唇	……	一四
丹前や	……	二〇	月ヶ瀬	……	五	掌に金魚の	……	一〇八
団体の	……	一九	つきつぎに	……	九	テトラポット	……	一三
段梯子	……	五	月の縁	……	九	手を貸せば	……	八五
暖房の	……	一三						

伝書鳩		九	読者欄		三	長生きをしてね		六
転宅に		二	督促状		三	長生きも芸		五
点滴を		一五	時計のような		五	流し目も		六
点と点		一五	床の間の置物		三七	なかなか		四
電灯の暗さ		四	どこやらに		九	泣きやまぬ		九
天皇の傘寿		一七	登山靴の		一七	鳴き竜の		二
天平の蔓		二三	どっちが		六	ナツメロへ		四
天平の屋根		一三	どちらにも		九	夏休みの学校		三
天ぷら屋		三	飛び乗りの		七	夏休み指切り		九
(と)			どぶろくは		三	七つ目の判		九
塔あれば影		一九	葬いの型		一三	七光りです		七
藤椅子に		六	友達方より		七	何か言うて		四
藤椅子の		四	共白髪		六	何事もなかった		四
十日程		九	友だちが		一七	何にでも		三
投函の帰り		一八	鳥籠の鳥に		三	何もおいてない		九
刀痕の		一四	土鈴買う		五	何者だという		七
倒産へ		六	鈍行の		五	菜の花の暮れず		三
塔一つ		一八	(な)			菜の花の中の		六
灯明の実に		一三	内縁という		九	波のりの		四
得意先		五	ライターに		五	習いたての		九

成金の趣味	………	突
(に)		
二階から	………	一七
憎さも憎し	………	一八
肉親の鳴咽	………	一九
逃げ腰で	………	二〇
二号と後妻	………	二一
煮凝りは	………	二二
二次会で	………	二三
二条駅	………	二四
二代目を	………	二五
日曜の	………	二六
日想観	………	二七
日本語で	………	二八
日本人	………	二九
日本に箸紙	………	三〇
日本間の	………	三一
日本ライン	………	三二
俄 遍路	………	三三

(ぬ)		
ぬすみたる	………	三四
(ね)		
姐さんの	………	三五
寝顔だけ	………	三六
寝転んで	………	三七
ネクタイを	………	三八
ネクタイだけ	………	三九
ネックレス	………	四〇
(の)		
野糞放るや	………	四一
後添いの	………	四二
野 仏の	………	四三
呑み友達	………	四四
飲み友達	………	四五
のむ話に	………	四六
飲める身の	………	四七
野良犬が	………	四八
のろけてる	………	四九

(は)		
ハーケンを	………	五〇
背 泳 へ	………	五一
蠅 叩 き	………	五二
蠅の止まつて	………	五三
這えば立て	………	五四
白砂青松	………	五五
橋へ来て	………	五六
はしゃいだ	………	五七
パジャマにも	………	五八
馬上より	………	五九
箸を拝んで	………	六〇
バスタオル	………	六一
蓮 の 花	………	六二
働いた色で	………	六三
八十五点と	………	六四
抜 剣 の	………	六五
初 恋 の	………	六六
初 節 句	………	六七
初旅や伊豆	………	六八

初旅や車中	………	一八	腹 違 い	………	三	引 潮 の	………	一五
初 入 選	………	三	腹 の 虫	………	三	髭 が 泣 き	………	三
初詣で御菰樽	………	二〇〇	張り替えた	………	一七	鬚 剃 っ た	………	二〇八
初詣で和顔愛語	………	二〇〇	針 の 数	………	一〇	髭 の 社 長	………	三
鳩 一 羽	………	一七	春うらら	………	一七	膝 抱 い て	………	一四
鼻がようきいて	………	三	春 になつたら	………	八	膝 を 抱 く	………	一五
花 屑 を	………	六	春 の 雨	………	一四	ひそひそと	………	一三
話 し 声	………	一七	春 の 風	………	一七	引越した後に	………	二
花 の 命	………	一五	春 や 春	………	一七	引越しの	………	一五
花 の 下	………	一六	晴れやらぬ	………	一三	羊 飼 い の	………	一五
はなれ小島	………	一三	半 玉 に	………	一五	人 が 悪 い わ	………	一六
花びらを	………	一三	晩 酌 の	………	一〇	人 恋 し	………	一七
母 者 人	………	一六	判 取 を	………	一五	独 り 居 の	………	一三〇
母のせて	………	一六	ハ ン ド バ ッ グ	………	一七	ひとり酌めば	………	一五
母の日の	………	一六	(ひ)	………	一七	一人ずつ	………	一五
母逝きて七日	………	一八	P K O	………	一三	一人一人	………	一六
母逝きて鉄の	………	一六	ビール瓶	………	一〇	雛 の 絵 の	………	一七
浜 風 に	………	一三	陽が落ちて	………	一六	雛 の 鼻	………	一四
ハミングで	………	一六	ひがんできけば	………	一六	雛 の 目 の	………	一四
バラ垣の	………	一六	引 金 を	………	一七	陽のあたる	………	一七

日の丸や	………	一八三	二日酔い	………	五	堀沿いに	………	一七三
暇と金	………	七	ふつふつと	………	二八	碧の名の	………	一七二
火元が	………	一五	筆まめの	………	一七	兵児帯の	………	一四
百度石	………	一八	船遊び今鳴る	………	一六	ベルを押す	………	二一
百までも	………	二三	船遊び千鳥	………	一六	ベレー帽	………	一六
美容院から	………	七	船遊びユラユラ	………	一六	扁額は	………	一六
表具負けに	………	三	船渡御に	………	一四	鞭声肅々	………	一八
病妻と	………	五	船酔いへ	………	一四	へんたい仮名	………	一八
病人の	………	八	踏切りの一番	………	一五	べんちゃらを	………	一五
昼寝から	………	五	踏切の雪だけ	………	六			
昼寝場所	………	一〇	踏切まできて	………	七			
(ふ)			ブラインド	………	七	方言を	………	一六
夫婦円満	………	一四	ブラットに	………	一八	放心の	………	一三
夫婦でも	………	一七	古本屋の	………	一七	牡丹や	………	一八
風蘭の香に	………	一六	霧囲気を	………	一五	子子に	………	一八
風蘭や	………	一六	文楽から	………	二五	豊明殿しずしず	………	二五
不思議やなあ	………	一五	(へ)			豊明殿妻と	………	二五
夫唱婦随	………	一五	弊衣破帽	………	三三	ボートも	………	一六
二人降り	………	四	平均寿命	………	一三	ボートは	………	一六
二人から	………	一七	平家村	………	五	ポケットから	………	一六

ポケットベル	………	二四	孫が来て	………	三	漫才師	………	一七
干竿の	………	三	孫達の	………	三	漫才の	………	二六
星空を	………	二六	孫曾孫	………	二〇	マンションに	………	一八
ボジョレヌーボー	………	二九	枅酒の	………	一五	マンションの	………	一八
ポスターは	………	三	又来ます	………	一五	まだまだ	………	二六
ポチ袋芝居	………	五	またしても	………	四	万引の	………	六
ポチ袋ませた	………	五	待ち呆け	………	四	萬葉は	………	九
補聴器で	………	一五	末席は	………	一五	(み)		
ホツホツと	………	一五	祭り客	………	一六	見出しと	………	一九
ぼてぢゅうで	………	一四	窓際の	………	二八	見送りに	………	三
炎の如き	………	一七	まどろんで	………	九	見送りの時間	………	六
ほほずりの	………	一三	マニラ陥落	………	一六	見送りの母	………	七
本気に	………	六	まばたきも	………	三	見事なる	………	一〇
本妻の	………	三	幻の邪馬台	………	一五	水打って	………	一六
(ま)			幻や菜の花	………	一九	水煙あげて	………	三
まあまあ	………	七	其も焚けば	………	一七	水すましに	………	四
舞妓がつけた	………	五	豆まきは	………	三	水取りが	………	四
蒔きおわる	………	一七	豆もろこ酒仙	………	一五	見せてから	………	一五
巻ずしの	………	三	豆もろこ三日	………	四	満ちたりた	………	一五
まぐれあたり	………	三	舞わぬ羽根	………	一四	道連れが	………	一六

道行の	……	二〇五	矢倉寿司	……	二七
民宿の	……	二〇五	焼け跡で	……	三
みんな帰して	……	二四	やさしい声	……	一六五
〔む〕			矢印に	……	一〇三
迎え傘の	……	三	やっと二人に	……	一八
無人駅を	……	二〇八	宿の朝	……	一〇三
結び目が	……	二六	宿の下駄うまい	……	一六
胸に花	……	二二三	宿の下駄ぬらし	……	一六
胸にバラ	……	二二七	宿浴衣	……	一四六
無欲に	……	二二	屋根に落ち	……	一四六
ムルタンの	……	二二五	藪柑子	……	二二〇
〔め〕			山寺の	……	二二三
名園の	……	四三	山の湯の	……	四四
名曲の	……	二九	やわ肌の	……	一四〇
名月や	……	二二五	〔ゆ〕		
名産を	……	二二五	優越感	……	六
明治大正	……	一五	夕ざくら	……	一六七
海布を煮く	……	三	夕涼み	……	六三
目くばせに	……	七九	夕立は	……	六三
めでたさは	……	二六	夕月に	……	二七
もういつぺん	……	二四			
燃えもせず	……	二〇			
文字読まぬ	……	二五			
鴟の賛	……	二六			
持ち味を	……	七三			
餅食べて	……	二〇一			
持って死ね	……	六六			
元軍人と	……	九七			
もの書きの	……	一八四			
物心母の泪	……	一六三			
ものすごい	……	二二九			
紅葉寺	……	二〇			
桃の花解脱	……	一九七			
桃の花孤独	……	一九七			
森田たまの	……	一八三			
〔や〕					
薬師堂	……	二〇五			
約束をとぼける	……	二六			
約束を破る	……	二四			

ゆうべ来た		七五	容態を		二	落語家の真面目		一七三
夕焼けに		二〇	養毛剤		一七	ラッシュ嬉し		三四
誘惑は		五	ヨーイドン		九	ラッパ飲み		五九
誘惑を		七三	欲すてて		二八	(り)		
浴衣着て		二四	横町の		二六	リーダーとも		六四
ゆきとどいた		三三	寄せ書きが		二三	李白一斗		一九三
近く春や		二四	寄せ書きは		二三	竜頭蛇尾		五九
近く春を		四一	よどみなく		七三	良縁か		六
ゆずられた		二〇六	夜中まで		七	両端は		六〇
油断がならぬ		九	夜長よし		一元	旅愁とや		二〇三
湯豆腐を		一六	四人目を		六	臨終の		二三
湯の街の		四	読初めや		一元	臨終は		六
湯の宿の		四六	嫁と呼ぶ		一六	(る)		
弓始め		二三	ヨヨと泣いて		七三	留守居して		三
百合活けて		二〇	弱味を見せる		六	留守番を		二三
ゆんべのおかず		一四	(ら)			流人史に		一五九
(よ)			ライバルの頭		一九	(れ)		
ようきいときや		九	ライバルの風邪		一五	レイかけて		一四六
陽気な		二〇	ライバルの祝電		一六	麗人の		一八九
養子会		七	落語家の崩れ		一七	劣性遺伝		四八

〔ろ〕

ろうけつ染……………一三九

老妻に……………二〇

老妻の……………一四

老妻は……………一七

老梅の……………六〇

老夫婦……………三〇

朗報や……………二〇四

六畳は……………一三

魯山人の……………三〇

露天風呂月見草……………九

露天風呂一葉……………四七

炉辺話……………一五二

ロマンスも……………二七

〔わ〕

ワイシャツを……………八五

わが命……………一七九

我が心……………一〇

若旦那……………二一

和顔愛語……………一六三

脇役の……………一五〇

若う言うて……………八四

忘れること……………一七〇

ワテが通り……………五三

輪にふいて……………二〇

笑い合うは……………一三八

あとがき

西田 柳宏子

このたび「定本 西尾 栞句集」を、栞先生の一周忌にあたつてご霊前にお供え出来たことは、本当に嬉しく、ご遺族はもとより川柳塔社同人一同の総意の現れとして皆様方と共に喜び合うものであります。

先生歿後、新主幹橘高薫風はじめ不肖理事長を含めて全常任理事会の総意として、栞先生のご遺徳を偲ぶ有意義なものを残したいと協議を重ね、西尾家から賜りましたご芳志を基金に、栞先生の定本句集発刊を全員一致で決定しました。しかしながら時期すでに切迫した十一月も過ぎて十二月の常任理事会で刊行委員が決まり、一月中に永い先生の川柳活動の中からそれぞれの時期区分に従つて候補句選出を決め、その労を鬼遊、天笑、岳人、重人、敏の諸氏がそれぞれ蔵書などから選出、楓楽、弥生、森子さん方の書き抜きなど多大のご努力により、総数二、六〇六句が一月末、主幹、理事長、小出智子副主幹の許へ届けられたのであります。

主幹はじめ私ども三名は、それぞれ一〇〇〇句を目標として選句をして二月末までに薫

風主幹の所へ寄せ、最終掲載句一〇〇〇余句を選出して田中正坊編集長の許に届けられ、最終チェックから編集部の方々のご苦勞を煩わし、最後は印刷、製本の業者の方々のご協力により無事出来上がったのであります。

この慌しい努力で生れた句集は、一にかかつて栞先生へのご遺徳と、先生を追慕する同人全員の至情により出来たものと、感謝と感激を新たにするものであります。

初代麻生路郎先生の職業川柳人としての妥協を許さぬ峻厳、二代目中島生々庵先生の端正なる威厳、いずれも立派な指導者を頂いた私達に、三代目としての栞先生の和顔愛語の包容力に親しみやすさと、一人一人手を執り合う親密感ある温もりに、「定本西尾 栞句集」は生れるべくして生れたものと言えましょう。

最後に栞先生の私達同人のみならず、川柳愛好家総ての人々に対しての思いやりは、高山大霊園に建立した川柳塔碑の裏面碑文に面目躍如として遺されています。

「川柳塔同人並に川柳愛好家は死して尚柳号で呼び合い、

永遠に川柳を語り合う絆をもって此処に愉しく眠る」

と…。これを以て拙い文になりましたが、あとがきとさせて頂きます。

平成八年三月十四日

著者略歴

本 名 西尾 巖（いわお）

明治42年 3月6日 富田林市富田林町で誕生

大阪府立富田林中学校卒業

関西大学法学部中退、藤田銀行を経て大阪帝国
大学医学部事務局に勤務、戦後、七宝製菓株式
会社を設立

昭和6年 阪大川柳会入会

昭和12年 川柳雑誌不朽洞会会員

昭和31年 不朽洞会理事長

昭和45年 川柳塔社副主幹

昭和45年 句集『水鶏笛』刊行

昭和55年 大聖勝軍寺山門脇に句碑建立

「一步出ずれば吾れ旅人となる心」

昭和57年 川柳塔理事長・主幹

昭和58年 川柳全集12『西尾巖』刊行

昭和63年 秋の叙勲で「木杯一組台付」受章

平成4年 社団法人 全日本川柳協会常任理事

平成5年 香川県大川郡白鳥町に句碑建立

「温泉や座り羅漢に寝る羅漢」

平成6年 川柳塔社名誉主幹

平成7年 5月15日死去 法名 水鶏院釈眞諦

句集刊行委員会

委員長	高杉 鬼遊	
委員	池 森子	板尾 岳人
岩佐ダン吉	榎本 吐来	奥田みつ子
鍛原 千里	河内 天笑	橘高 薫風
小出 智子	塩満 敏	田中 正坊
玉置 重人	西田柳宏子	西出 楓楽
宮西 弥生	山本希久子	山本 義子
		(50音順)

平成8年5月1日発行

定本 西尾 栞句集

頒価 3,000円

発行所 川 柳 塔 社

〒545 大阪市阿倍野区三好町2-10-16
ウエムラ第2ビル 202号室

電話 (06) 629-6914
振替 00980-5-33368

美研アート印刷

